

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ドイツ語存在表現の統語論と意味論
Author(s)	吉田, 光演
Citation	広島ドイツ文学 , 34 : 1 - 16
Issue Date	2022-02-20
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051975">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051975</a>
Right	Copyright (c) by Author
Relation	



# ドイツ語存在表現の統語論と意味論

吉田 光演

## 1. 序論 —問題設定—<sup>1</sup>

個体・モノ (entity/Entität: e) は日常生活において前提されたありふれた存在である。周知のように、日本語では人・生物の存在は「いる」、モノの存在は「ある」で表現される。

(1) 太郎は居間にいる。           (2) テレビは居間にある。

一方、ドイツ語でモノの存在を表す動詞には、*sein, da sein, es gibt, existieren, vorhanden sein* などがある。DUDEN (2009)は、*sein* の例として(3)を挙げている。

(3) Die Kinder *sind* {im Garten/unten}. (DUDEN (2009: 417))   自動詞完全動詞

(3)は、場所を表す場所句である前置詞句や副詞を伴って、人・モノ (Lokatum)の所在 (Lokation)のあり方について述べる文であり、場所句がないと非文法的になる。

(3)' \*Die Kinder *sind*. (子供たちはいる)   (\* 非文 = 「非文法的」であることを表す)

場所を伴わない „absolute use“ (Kahn 1966)の存在動詞 *sein*, あるいは「絶対存在文(西山 (2003))」における *sein* は、Dolińska (2012)によれば、抽象的な概念的な主語と、命題内容を表す主語の場合に限定される。(Dolińska 2012)

(4) a. Gott *ist*. (Dolińska 2012: 66)

b. \*Ein Gespenst *ist*. (cf. OK. Finn glaubt, ein Gespenst *ist* da. Google 検索)

(5) Es kann doch nicht *sein*, dass die *dümmere* sind als wir. (Dolińska 2012: 66)

---

<sup>1</sup> 本稿は2021年5月15日に広島大学で行われた第102回広島独文学会研究発表会での筆者の発表を修正したものである。発表会で寄せられた意見、匿名の査読者の指摘に感謝する。また、ドイツ語要旨作成でお世話になった広島大学 Hans-Michael Schlarb 准教授に感謝する。本研究はJSPS 科研費 18H00664 (代表: 藤縄康弘 (東京外国語大学))の助成を受けている。

(5') \*Dass die dümmer sind als wir, ist doch nicht. ((5)から虚辞 *es*, 助動詞 *kann* を除く)

(4a)は唯一者 *Gott* が主語で、容認されるが、(4b)のようにその他の主語では *sein* 単独の述語は非文である。<sup>2</sup> また、(5)では前域に虚辞 *es*, 助動詞 *kann* が現れており、純粋な *sein* 存在文ではない。*es* なしで *dass* 文を前置させ、助動詞 *kann* を削除した裸の *sein* 文(5')は非文である。ゆえに、Dolińska が指摘した命題主語による *sein* の認可は疑わしい。

*sein* は、存在意味と、主語と述語を連結するコピュラ(Kopula 繫辞)の意味を含んでおり、*sein* が存在を表すのか、主語と場所句を繋ぐコピュラであるのか(所在文の *sein* はコピュラではなく存在意味の変異か) 判別し難い。私見では、先行研究では存在とコピュラを含め、言語表現と(存在)意味、(コピュラの)形式的意味についての議論が錯綜していると思われる。これを見直すことが本稿の第一の目的である。即ち、存在文の *sein* はコピュラ文の *sein* と区別されるのか? また、*sein* と共起する *da sein* の *da* は何を表すのか(*da* は虚辞なのか)? 所在文の *sein* はどのように統語的・意味的に分析されるのか? 絶対存在文と所在文はいかに同定されるのか? 本稿ではこれらの問題を検討する。なお、*sein* の他にも *existieren*, *bestehen*, *vorhanden sein* があるが、*bestehen* は非分離動詞、*vorhanden sein* は *sein* を伴う形容詞であり、複合表現である。*existieren* は「存在する」を意味するが、ラテン語 *existere* 由来であるため、複合表現や *existieren* について詳しくは考察しない。

第二の問題は、英語の *there* 構文と対応するものとして比較される *es gibt* 構文である。

(6) *Es gibt keinen Ausweg.* (逃げ道はない) DUDEN (2009: 407)

*es* は主格主語の働きをするが、*es* 以外の主語が生じない点で、虚辞ではなく必須の擬似項である(„*Es regnet.*“の *es* と同様)。 *es gibt* 構文の先行研究は多いが(Pütz (1975), Bayer & Suchsland (1997), Czinglar (2002), 最上 (1987)など)、英語の *there* 構文と異なり、定冠詞を伴う定名詞句も現れるので、定性効果 (definiteness effect: 定名詞句の生起が限定される、cf. Milsark 1974) が見られない。また、眼前提示用法では使いにくいという傾向がある。

(7) *Es gibt zwei deutsche Staaten. Es gibt die Verpflichtungen der vier Mächte(...). Es gibt den europäischen Prozeß. (...).* (Archiv der Gegenwart, 2001, DWDS コーパス。下線部筆者)

(8) *Es gibt ein Zimmer für Gäste unter dem Dach.* (Judith: *Sommerhaus, später*, 1998, DWDS)

(9) ?*Auf dem Tisch gibt es ein Buch.* (大喜 2016: 68) (cf. *Auf dem Tisch ist es ein Buch.*)

英語の *there* 構文と異なり、(7)のように定冠詞を伴った定名詞句も文法的である(cf. \*,\**There*

<sup>2</sup> 他にデカルトの„*cogito ergo sum.*“の独訳 „*Ich denke, also bin ich.*“がある。しかし、\*,\**Der Weihnachtsmann ist.*“など、一般的な個体を *sein* 絶対存在文で表すことはできない。

is the European process.“)。(8)は屋根裏に部屋があることを示す眼前描写ではなく、状況記述であり、客に対して屋根裏なら部屋が用意できるという情報提示である。大喜 (2016)によれば、眼前提示として場所句を伴う(9)のような文は *sein* を伴う所在文の方が適切であり、*es gibt* 文では母語話者には容認されない。それでは *es gibt* 構文の存在物は何を意味するのか？また、Czinger (2002)によれば、*es gibt* 構文は(7)のような習慣的・持続的なモノの存在を表すが、一時的な出来事の存在（眼前描写）は表現し難い(„?Es gibt viele Pferde vor dem Haus.“, Czinger (2002: 92))。本稿ではこれらの問題について考察する。なお、本稿ではモノの存在を表す表現を存在文とし、場所句と対象を伴う表現を所在文と定義する。

## 2. 存在表現の意味

まず存在表現の意味を考える。モノの存在は哲学的存在論(Ontologie)では古くから議論されてきた。ギリシア哲学以来、個物の存在を認めるか、概念の存在まで認めるのか、また、モノの存在を否定し、個人の主観的表象のみを認めるかというように、实在論と唯名論の対立が続いてきた。プラトンは、パルメニデスの「存在は一にして不変」という存在者の絶対存在を認める立場に影響を受けてイデア論を展開した。プラトンのイデア論では、名前・概念（例えば「美」という概念）は実在する。一方、中世のオッカムなどの唯名論の立場では概念は実在せず、個物のみが実在する。カント以降は、存在論よりも認識論に焦点が当てられ、客観的实在よりも世界に対する主体の認識のあり方が問題となった。形而上学では、個体・概念・類といったカテゴリーだけでなく、存在者を定立させている世界があるのかどうか問われる。近年では、Markus Gabriel の„Warum es die Welt nicht gibt.“(2013)のように、一つの世界の存在を否定し、各人にとって多様な世界の存在を認める新しい实在論が話題になっている (Gabriel 2013)。この種の哲学的存在論は、それ自体興味深い、経験的に検証不可能であり、結局は思弁的なものにとどまるので、ここでは哲学的議論には立ち入らず、言語学的な観点から存在意味を考えていくこととする。

まずモデルとして、世界とモノは実在すると想定する。これは生活者の素朴な感覚であり、暑い時は水を飲み、寒い時は熱い茶を飲むのと同様である。これは意味論的にはフレーゲ (Gottlob Frege) やラッセル (Bertrand Russell)の实在的な意味論、外延の考えに対応する。また、一角獣(Einhorn)のような架空動物の存在も想定できる。現実世界  $w_1$  には実在しないが、 $w_2$  のような可能世界(mögliche Welten)では存在するというモデルである。可能世界は、フレーゲの *Bedeutung* と *Sinn* の区別を把握し、内包を考える上で重要である。例えば、「明けの明星」と「宵の明星」は外延(*Bedeutung*)としては同じ対象（金星）を指す (*denotieren*)が、内包 (*Sinn*)としては別々の状況での概念（内包）を指しており、内包は複数の可能世界（及び時間）と関連づけることによって初めて論ずることができる。

言語表現の意味対応として、現実世界、過去の世界、未来の世界、空想世界などの可能世界  $w_1, w_2, w_3, \dots$  とその集合  $W$ 、時間  $t$  とその集合  $T$  を世界のモデル  $M$  として設定し、ま

た、項・変項に対する値の割当て関数  $I, g$  を導入する。それら世界の中に対象  $e$ 、及び  $e$  の集合  $A$  (対象の領域) を設定し、モノの存在を保証する。対象には人間、動物、生物、自然、人工物、空想の産物などの対象に属する個体があるが、ここでは詳述しない。また、David Lewis のように、複数の可能世界が実際に実在するという複数世界 (パラレルワールド) の考えもあるが、可能世界の実在性の問題は考慮せず、可能なモデルとして  $M$  を立て、そこで真理条件を問題にする。その論理表示は、正確には次のように定義できる。

(10) 内包論理 (cf. Dowty, Wall, Peters (1981), 「モンタギュー意味論」)

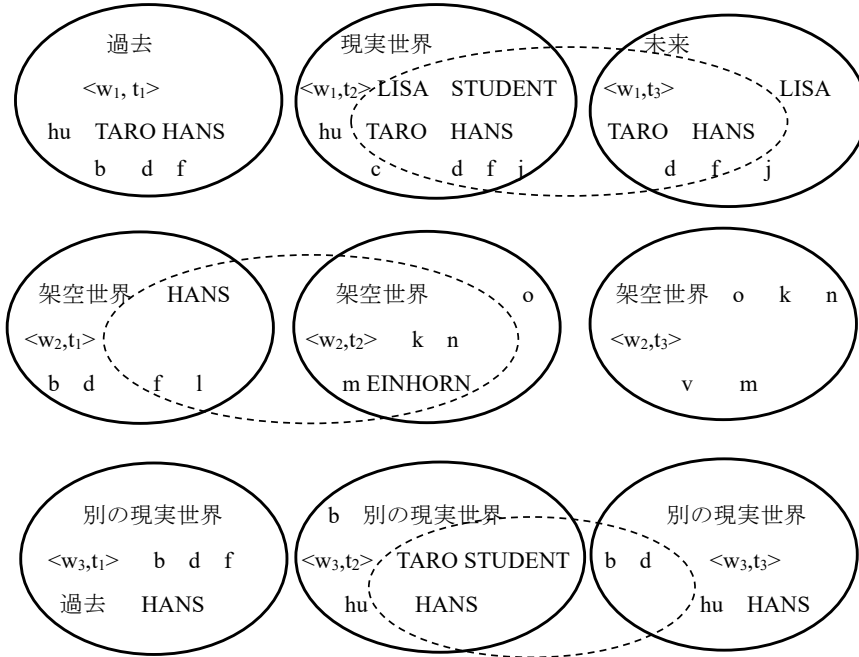
- a)  $e$  (entity) はタイプ (type) である。(タイプ=言語表現の集合の意味を階層的に区別)
- b)  $t$  (truth value: 真理値) はタイプである。
- c)  $a, b$  がタイプなら、 $\langle a, b \rangle$  もタイプである。(  $\langle a, b \rangle$ :  $a$  から  $b$  への関数)
- d)  $a$  が任意のタイプなら、 $\langle s, a \rangle$  もタイプである。<sup>3</sup> ( $s$ : sense 内包=世界から外延への関数)
- e)  $W$  は可能世界  $w$  の集合である。(  $w \in W$  )
- f)  $T$  は時間  $t$  の集合である。(  $t \in T$  )
- g)  $D_e = A$  ( $A$ : 個体の集合である談話領域。すべての個体が集合  $A$  に属する)
- h)  $D_t = \{0, 1\}$  (真理値の集合)
- i)  $D_{\langle a, b \rangle} = D_b^{D_a}$  ( $\langle a, b \rangle$  の領域は、 $a$  の領域  $D_a$  から  $b$  の領域  $D_b$  への関数)
- j)  $D_{\langle s, a \rangle} = D_a^{W \times T}$  ( $\langle s, a \rangle$  ( $a$  の内包  $s$ =sense) の領域は、 $W \times T$  の積から  $D_a$  への関数)
- h)  $\alpha$  が非論理定項なら、 $[[\alpha]]^{M, w, t, g} = I(\alpha)(\langle w, t \rangle)$  ( $\langle w, t \rangle$  の  $\alpha$  の外延は解釈関数  $I$  によって与えられる  $\alpha$  の内包を  $\langle w, t \rangle$  に適用した出力結果である)。
- i)  $\alpha$  が変項なら、 $[[\alpha]]^{M, w, t, g} = g(\alpha)$ 。(  $g$ : 変項に個体を割り当てる解釈関数)
- j)  $\alpha \in ME_{\langle a, b \rangle}$ , かつ,  $\beta \in ME_{\alpha}$  なら ( $ME$ =有意味表現の集合),  $[[\alpha(\beta)]]^{M, w, t, g} = [[\alpha]]^{M, w, t, g} ([[ \beta ]])^{M, w, t, g}$ .  
(関数  $[[\alpha]]^{M, w, t, g}$  に, 項  $[[\beta]]^{M, w, t, g}$  を適用した結果 (関数適用))。

モノの存在はモデル  $M = \langle A, W, T, \langle, I \rangle$  において保証される ( $\langle$  は時間  $t$  の順序付け集合,  $I$  はすべての非論理的定項に 10g)~10j) を割り当てる関数)。例えば、「広島大学」は現実世界  $\langle w_1, t_2 \rangle$  で広島県にある大学  $hu$  (個体) を指示し、内包が定められる ( $W \times T$  における  $\langle s, hu \rangle$  の値。2 ソートタイプ理論では  $hu_{w, t}$  と表記)。Einhorn は現実世界  $\langle w_1, t_2 \rangle$  にはいないが、 $\langle s, e_1 \rangle$  の内包を示し、可能世界  $\{ \langle w_2, t_1 \rangle, \langle w_2, t_2 \rangle \}$  で存在する。例えば、次のようなモデル  $M$  を設定する。円は世界の指標  $\langle w, t \rangle$  を表し、現実世界の時間指標 (過去, 現在, 未来), 架空の世界の時間指標, ありうる別の現実世界 (個体のあり方を除けば現実世界と類似する世界) の時間指標を想定する。それぞれの世界に特定の個体が存在し、それらの個体は

<sup>3</sup> 可能世界への量化・抽象化を可能とする 2 ソートタイプ理論 (two sorted type theory) では、可能世界  $s$  も基本タイプとされる。 $e, t, s \in T$  ( $T$ : タイプの集合。cf. 吉本・中村 (2016: 165)。本稿では適宜 2 つを使い分ける。

一定の属性を与えられる(LISA, TARO, HANS は現実世界の指標<w<sub>1</sub>,t<sub>2</sub>>, <w<sub>1</sub>,t<sub>3</sub>>では学生 (STUDENT)の集合の要素である。個体の属性の集合は点線の円で表す)。

(11) モデル  $M$



Stechow (2001:6)に従い (若干修正), 存在は可能な個体の集合である述語 *exist* で表され, その外延は世界によって変化するものとする。例えば, „Da ist Hans.“ は次のようになる。

(12) a. Da ist Hans. (Hans がいる, *da ist = existiert* と等価と考える)

- b.  $[[\text{exist}]]^{M,w,t,g} = \lambda y \exists x [\text{exist}_{w,t}(x) \ \& \ y=x]^{M,w,t,g}$  (*exist* は可能世界  $w, t$  において,  $\text{exist}_{w,t}(x)$  である個体  $x$  が存在し, かつ,  $y=x$  であるような個体  $y$  を出力する関数)
- c.  $[[\text{Hans}]]^{M,w,t,g} = [[\text{Hans}]]$  in  $w$  at  $t$ . ( $w, t$  において Hans である個体)
- d.  $\lambda y \exists x [\text{exist}_{w,t}(x) \ \& \ x=y]^{M,w,t,g} ([[ \text{Hans} ]])^{M,w,t,g} = \exists x [\text{exist}_{w,t}(x) \ \& \ x= \text{Hans}]$  in  $w$  at  $t$ .

(モデル  $M, w, t$ , 解釈関数  $g$  に関して, „Da ist Hans.“ が真になるのは, 世界  $w, t$  において Hans であるような個体  $x$  が存在する時, その時に限られる)

(13) ( $\doteq$  12d)  $\exists t [t=s^* \ \& \ \text{exist}_{w,t}(\text{Hans})]$  in  $w$  at  $t$ . ( $s^*$ : 発話時。Hans が世界  $w, t$  で存在し, 発話時  $s^*$  と同じ時点  $t$  が存在する時に真になる ( $t$  は時間インターバル  $t$  を含む):

$\exists t [t=s^* \ \& \ \exists t' [t' \subseteq t \ \& \ \forall t' [\text{exist}_{w,t'}(\text{Hans})]]]$  in  $w$  at  $t$ . Hans の存在は一定時間持続。)

(12d)の解釈によれば *da sein* という述語は *exist* で表され, *Hans* という個体の存在を表すが, この意味は(12c)のように固有名詞 *Hans* の意味(定項の割り当てとしての外延)と実質同

じである（時間との関連はあるが）。不定名詞句の存在解釈の場合は事情が異なる。

(14) a. \*Ein Einhorn ist.      b) Da ist ein Einhorn.

(15)  $[[\text{Da ist ein Einhorn}]]^{M,w,t,g} = \exists x[\text{exist}_{w,t}(x) \ \& \ \text{Einhorn}_{w,t}(x)] \text{ in } w \text{ at } t. = \exists t[t=s^* \ \& \ \exists x[\text{exist}_{w,t}(x) \ \& \ \text{Einhorn}_{w,t}(x)]] \text{ in } w \text{ at } t.$ （世界  $w,t$  において、一角獣である属性を満たすような個体  $x$  が発話時（発話時を含むインターバル）において少なくとも一つ存在する。）

述語 *exist* は *ein* に対応し、変項  $x$  を項として存在量子  $\exists$  によって束縛される（一角獣の集合に含まれる  $x$ ）。現実世界に一角獣は存在しないが、架空の可能世界のどこかにいると解釈できれば、この文は真になる（述語 *exist* は外延的意味であり、現実世界  $w,t$  で「一角獣」を満たす特定の対象の存在を表すので、(15)は偽となり、問題がある。これについては後述）。しかし、この意味では *Einhorn* の存在意味は存在量子によって担われており、*sein* が果たす貢献はない。これが *sein* の意味解釈の問題である。実際、カントは、『純粋理性批判』で「*sein* は実在的な述語ではない」と述べ、*sein* の実在的意味を否定している。

(16) ある（*sein*）が実在的な述語ではないことは明らかである。これはある物の概念に付け加えることができるような別の概念ではないのである。この述語が示すのは、たんに事物が指定されているということだけであり、物そのものについての特定の規定が加えられたということだけである。論理学ではこの[*sein* という]語は、判断の繫辞に過ぎない。」（カント『純粋理性批判』（1787<sup>2</sup>）, 第3章, 703: 627）

フレーゲ（1892）も、*existieren* のような存在の外延的意味については懐疑的である。

(17) 私は、存在をある一つの概念の性質と称した。私がこのことで何を意図しているかは、実例で明らかになるであろう。「4 の平方根が少なくとも一つ存在する」という文においては、例えば確定された数 2 についても、-2 についても、なにかが言明されているのではなく、一つの概念、つまり 4 の平方根、について、この概念は空ではないと言明されているのである。」（フレーゲ「数と対象について」（『フレーゲ著作集』4: 57.）。

フレーゲは、存在は個々の個体についてではなく、概念についての高階述語であると指摘している。ここでは哲学的存在概念について深入りせず、世界におけるモノの存在、不定の対象の場合には、ある述語に属する集合要素の存在という意味を確認するとどめる。

### 3. *sein* (da sein)は何を表すか？

次に言語形式の *sein* を見る。*Gott ist.* という文を除いて、*sein* が場所句なしで絶対存在文

として単独では使えないことは見た。*Gott ist.*の *Gott* はキリスト教の神としての唯一者で、固有名詞 *der Gott* と同じであり、この文は「神がいる」でなく、「神はいる」を表す。しかし固有名詞でも *sein* 単独では非文である。定名詞句も不定名詞句も *sein* 単独で現れない。

(18) a. \*Sherlock Holmes war/ist. (cf. \*Sherlock Holmes war/ist nicht.)

b. \*Der Außerirdische ist. c. \*Ein Außerirdischer ist. d. Ein Außerirdischer ist da.

副詞 *da* がある(18d)は許容されるが、*sein* 単独の(18a, b, c)は非文である（否定辞 *nicht* も許容できない）。これは、ドイツ語の主文が動詞第2位(V2)言語であり、また基底構造（従属節）が SOV 語順であり、前域は中域内の句の移動によって、V2 位置は時制（及び人称素性）を担う定動詞によって、埋められねばならないことによって説明できる。

(19) a. [<sub>CP</sub> [<sub>DP</sub> ] [<sub>C</sub> ] [<sub>TP</sub> (文) *der Außerirdische ist*]] (基底構造：前域も V2 位置も空)

b. \*[[<sub>CP</sub> [<sub>DP</sub> *der Außerirdische* ] [<sub>C</sub> *ist*] [<sub>TP</sub> (~~*der Außerirdische*~~) (~~*ist*~~)] ] (表層：中域が空)

(18b) *Der Außerirdische ist.*は、(19a, b)のステップを経て派生するので、表層(19b)では中域に要素がない。特に言明の述部が存在しない(TP=tense phrase:文)。<sup>4</sup> „Sherlock Holmes existiert nicht.“の場合は文法的だが、これは *existieren* が存在の語彙意味を TP-VP 内で担い、中域内で痕跡として残しているからである。一方、*sein* は機能範疇としての時制意味しかなく、存在を表しても語彙意味は希薄である。*sein* の場合も、„Der Außerirdische ist da.“などの場所句があれば、中域も埋まり、コンピュータとしての *sein* の役割も実現され、文法的になる。<sup>5</sup> この分析が正しいことは、従属接続詞に導かれた節(CP)で、SOV 語順で中域内に語彙的要素があれば、名詞句と *sein* が絶対存在文として現れることによって示される。

(20) a. Ohnehin: Wenn ein Geist ist, scheint es angemessen, (...) (Google 検索)

a'. [<sub>CP</sub> ( ) [<sub>C</sub> [<sub>C</sub> *wenn*] [<sub>TP</sub> *ein Geist ist*]] (表層で主語と *sein* が中域にある)

(21) [<sub>CP</sub> [<sub>TP</sub> *Geister sind*]], so müssen sie irgendwo sein, (...) (Google 検索、(20)と同様)

(20)(21)の *wenn* 文は条件節に導かれているという意味で、存在の断定(判断)ではない。しかし、それは存在述語 *sein* の動詞の意味論的要件とは関係がない。一方、日本語は純粋

<sup>4</sup> Haider (1993: 151)の例のように、VP 話題化によって前置される場合でも、副詞などは中域に残る：(i) [<sub>CP</sub> [<sub>Ein Zug entgleist</sub>]<sub>j</sub> [<sub>C</sub> *ist*]<sub>k</sub> [<sub>TP</sub> *hier erst kürzlich t<sub>j</sub> t<sub>k</sub>*]].

<sup>5</sup> 匿名の査読者から、[[<sub>CP</sub> *Der Außerirdische* [<sub>C</sub> *ist*] [<sub>TP</sub> *nicht*]]のような否定文でも中域に *nicht* が残るので認可されるのではないかという指摘があった。しかし、否定辞 *nicht* は語彙範疇ではなく、機能範疇であり、演算子意味を持つので中域内の要素の語彙的意味は希薄であり、それゆえに否定文も認可され難いと考えられる。



な SOV 語順であり、動詞移動もないので、「幽霊がいる」といった絶対存在文も問題がない。他にも、デカルトの言葉 „Ich denke, also bin ich.“の *bin ich* も存在を表すが、この場合、*also* という接続副詞があることに注意すべきである。(22)のように、前域に副詞 *also* があり、*bin* (<*sein*)は V2 位置に移動するが、主語 *ich* は中域内にとどまる。従って、中域が空白になっているわけではない。

(22) [CP [<sub>Adv</sub> also]<sub>h</sub> [C' [C bin]<sub>j</sub> [TP ich t<sub>h</sub> t<sub>j</sub>]]]

絶対用法の *sein* は、*existieren* と類似して持続的インターバルを持つ状態を表す。*ist/war* のように現在・過去時制の変化は可能であるが、„Gott ist.“の場合の *sein* は一時的時空間における状態述語(stage-level predicate)ではなく、時間変化のない恒常的な個体述語(individual-level predicate)に近いものと考えられる (Kratzer 1995)。時制はあっても継続性を表すので、一時状態を示すのには適していない。よって、„Gott ist.“は問題ないが、„Ein Alien ist.“(確認できない「宇宙人が(偶然その場に)いる」という記述)では使えない。<sup>6</sup>

では、*da* が前域に現れる *da ist* (*da sein*)は何を表すのだろうか？

(23) a. Eine Katze ist da/dort.    b. Da ist eine Katze (im Garten). (Weinert 2013: 40)

*ist da* の *da* は場所句対応で、*dort* 同様に直示的相対空間位置についての言明である。(23b) の *da ist* の場合、*da* にアクセントがあれば(23a)と同様だが、無アクセントの場合、*im Garten* のような場所句と共起するので、場所を表すのではなく、前域を埋める虚辞であり、*there* 構文対応の存在文と分析できる (南ドイツ方言では、*es hot* (*es hat*))。ドイツ語の主文では、前域を何らかの要素で埋めねばならず、話題 *Topik* がなければ *da* か *es* という虚辞で埋められる。*da ist* の場合、中域に名詞句がとどまるので *da sein* は存在文を表せる。<sup>7</sup>

(24) [CP da [C' [C ist] [TP eine Katze (~~ist~~)]]]

(24)はコピュラ文ではない。„*Da bin ich.*“は話し手が帰ってきたことを表す「ただいま」であり、「私はそこにいる」という意味ではない。*sein* は存在動詞だが、V2 語順のために単独ではなく、*da sein* の形で存在表現になる。英語は V2 言語ではないが、„\*A unicorn is.“のような単独用法は非文である。<sup>8</sup> これは„*There is a unicorn.*“のような *there* 構文によって阻

<sup>6</sup> Czinglar (1997)は *sein* を „rein lokatives Prädikat“ とするが、絶対用法について触れていない。

<sup>7</sup> „*Es war einmal ein König.*“のような *es* も前域の虚辞であるが、*es* は必ずしも存在文に限らず、(*passieren, kommen* などの) 非対格構文にも現れる („*Es kamen viele Familien.*“)

<sup>8</sup> 英語 *BE* の絶対存在用法も同じく、*God is.* のような例を除いて、容認しにくい。Cann (2003)は „*Neuroses just are* (they don't need a cause).“の例を挙げているが、副詞 *just* がない „\**Neuroses*

止されるのか、英語も V2 の残滓なのか、A is B のコピュラを内在化するのかという問題がある。コピュラ文の *sein* は、叙述用法においては意味論的貢献は（時制を除けば）ほとんどない。*sein* は、Partee (1986) の apply predicate (述語適用) 規則と同様に、述語名詞  $\langle e, t \rangle$  と結び付いて述語を作るタイプ  $\langle \langle e, t \rangle, \langle e, t \rangle \rangle$  を表し、述語 *Student* ( $\langle e, t \rangle$ ) を取って再び述語タイプを作る (*Student sein* =  $\langle e, t \rangle$ )。Cann (2003) は *BE* の存在意味とコピュラ用法は同じ自動詞用法であり、存在の *BE* に還元されると主張する。Cann はダイナミック意味論の枠組みで、存在の *BE* の意味は後続の述部の意味によって具体化し、コピュラの場合には叙述的に解釈され、最終的には語用論的に決定されるとする。*sein* は存在意味が中核であるという指摘は興味深いが、ではなぜ絶対用法がほとんどないのか説明がつかない。本稿では、存在の *sein* とコピュラの *sein* は関連しつつも統語的に別ものとする (cf. Partee (1986))。

- (25) a. Hans ist Student.    b.  $\lambda x[\text{STUDENT}_{wt}(x)]$  („Student“は学生の集合の一員である集合)  
      c.  $\text{sein} = \lambda P[\lambda x[P_{wt}(x)]]$  ((25b) と結合して  $\lambda x[\text{STUDENT}_{wt}(x)]$  を派生)  
      d. Hans ist Student.  
      e.  $\exists t[t=s* \ \& \ \text{STUDENT}_{wt}(\text{Hans})]$  in  $w$  at  $t$ . (世界  $w$ ,  $t$  で発話時  $s^*$  において Hans が学生であるような時間  $t$  (インターバル) が存在する。)

#### 4. 所在文 (lokative Sätze)

場所句を伴う所在文は、*sein* や *liegen, stehen, hängen, sitzen* などの位置動詞 (Positionsverb) と場所句 (Lokation), 対象 = 所在物 (Lokatum) からなる。

- (26) a. Auf dem Tisch ist/liegt ein Buch.    b. #Ein Buch ist/liegt auf dem Tisch. (#: 有標)  
      c. Es ist/liegt ein Buch auf dem Tisch. (前域の虚辞 *es*)  
      d. ??Auf dem Tisch ist/liegt es ein Buch. (OK. Auf dem TISCH, ist es ein Buch.) (不定名詞句)  
      (27) a. Auf dem Tisch ist/liegt das Buch.    b. Das Buch ist/liegt auf dem Tisch. (定名詞句)

対象を表す名詞句が不定名詞句の場合、場所句が先立つ (26a) が無標で、名詞句が前置される (26b) は有標である。(26d) の *es* は冗長で容認されない。これは、虚辞 *es* が前域もしくは節の先頭でのみ認可されることで説明できる。定名詞句の場合は、定表現が前提され、名詞句が前置される (27b) が無標である。場所指定による提示、つまり「机の上に何かがあるか」を伝達する文では不定名詞句が無標であり、(26a) が場所句を伴う典型的所在文であり、英語 *there* 構文とは語順が異なる。この場合、場所句における場所の存在が前提され、*„Was*

---

*are.* “では容認できず、非常に稀な用法であることは確かである。

ist auf dem Tisch?“への答えとなる。また、場所句があれば常に所在文になるのではないことに注意したい。„Auf der Bank schläft ein Mann.“では場所句があるが、動詞 *schlafen* の主語は動作主である。所在文として認定できるのは、主語が場所における所在者を表す対象の意味役割を持つ場合のみである (<LOC, THEME>の意味役割を持った項構造)。

場所の前置詞句は意味的に1項述語だと考えれば、対象の位置する場所について言及するタイプの„Hans ist im Kino.“のような例は、*sein* の叙述用法と同様に分析できる。

- (28) a. Hans ist im Kino.    b. im Kino:  $\lambda x[\text{IN}(x, \iota y[\text{Cinema}_{wt}(y)])]$  (特定の映画館の中の状態)  
       c. *sein* =  $\lambda P[\lambda x[P_{wt}(x)]]$     d. im Kino *sein*:  $\lambda x[\text{IN}(x, \iota y[\text{Cinema}_{wt}(y)])]$  ( $\iota$ : 特定個体)  
       e.  $\exists t[t=s^* \ \& \ \text{IN}(\text{Hans}, \iota y[\text{Cinema}_{wt}(y)])]$  in *w* at *t*. (Hans は発話時に映画館の内部にいる)

ここでは *sein* の存在意味はなく、叙述の意味である。一方、所在文には存在意味がある。

- (29) a. Auf dem Tisch ist ein Buch.    b. auf dem Tisch:  $\lambda x[\text{ON}(x, \iota y[\text{Table}_{wt}(y)])]$   
       c. *sein* (=exist):  $\lambda P \exists x[\text{exist}_{wt}(x) \ \& \ P_{wt}(x)]$  (exist: 存在の意味)  
       d. auf dem Tisch *sein*:  $\lambda x[\text{ON}(x, \iota y[\text{Table}_{wt}(y)]) \ \& \ \text{exist}_{wt}(x)]$  (机の上に *x* がある *x* の集合)  
       e.  $\exists t[t=s^* \ \& \ \exists x[\text{ON}(x, \iota y[\text{Table}_{wt}(y)]) \ \& \ \text{Book}_{wt}(x) \ \& \ \text{exist}_{wt}(x)]]$  in *w* at *t*. (発話時に机の上部の領域に「本」であるような個体 *x* が一つ存在する。)

- (30) a. Unter dem Tisch liegt eine Zeitschrift.  
       b.  $\exists t[t=s^* \ \& \ \exists x[\text{UNDER}(x, \iota y[\text{Table}_{wt}(y)]) \ \& \ \text{Journal}_{wt}(x) \ \& \ \text{exist}^{\text{LIE}}_{wt}(x)]]$  in *w* at *t*.  
       (発話時に机の下部の領域に「雑誌」である個体 *x* が横たわった状態で存在する。)

*liegen* のような状態の様態を表す位置動詞は、 $\text{exist}^{\text{LIE}}$  のように存在意味に様態を追加する形で表すことができ、単なるコピュラ動詞の変異ではない。また、位置動詞は状態動詞ではあるが、恒常の状態も、一時的の状態も表せる („Hamburg liegt an der Elbe.“: 恒常的 vs. „Das neue Wochenblatt liegt jetzt am Kiosk.“: 一時的)。

## 5. *es gibt* 構文の特徴と意味

次に *es gibt* 構文を検討する。英語の *there* 構文に対応するドイツ語表現は *es gibt* 構文と考えられることが多い。*es gibt* 文は存在文として使えるからであるが、話し手・聞き手が相対する時間空間的な場面において、モノのあり方を提示する存在文としては、*es gibt* 文は必ずしも適切に使用できるわけではない。

- (31) a. Es gibt einen Gott.    b. Es gibt jetzt ein Gegengewicht, das ist ein Fortschritt. (Google 検索)  
       c. Es gibt viele Dänen ohne Job. (Czingerlar (2002: 92))

(31)では、場所句は表現されておらず、対象の存在を眼前で描写しているのではなく、一般命題としての存在命題、現実世界における状況の記述、抽象的な概念の存在(*ein Gegengewicht*)が示されている。(31c)は眼前描写として「職のないデンマーク人達」の存在を確認しているとも理解できるが、事態の報告としても解釈できる。大喜 (2016)は、Lakoff (1987)に従って、存在文では一般に具体的事物から抽象的概念へと写像する「実在的メタファー」が利用されると指摘しているが、*es gibt* 構文では「実在的メタファーが働かず、情報の提供ないし新情報の提示である」と述べている。また、*es gibt* 構文では（直接の現場指示としての外部照応ではなく）発話の場で想定された空間を指示する文脈指示用法として、*hier* などの直示表現と共起すると分析する。「*es gibt* 構文は眼前提示ではない」という分析は的確であるが、しかし、情報提供や新情報提示という把握では不十分と思われる。眼前提示として現実場面を直示的に指示していても、*es gibt* 文が成立する場合があるからだ。

(32) a. Und später in der Stube beim Anblick eines Laufstalls: Guck mal, hier gibt es ein Kinder-Gefängnis! (「ご覧、ここに子供の牢獄がある」 Google 検索)

b. „Guck mal, dort gibt es ein Selbstbedienungsrestaurant.“ Er wies nach links. (Google 検索)

(32)の *es gibt* 文では、話し手が発話時に聞き手に„Guck mal“と現場指示し、その後に *hier, dort* の直示表現が表れており、これを現場指示ではないと捉えることはできない。(32a)では子供がベビーサークルを眺めて、„Guck mal“の指示によって「子供の牢獄がある」と述べる。(32b)では話し手が聞き手にある場所を指して、„Guck mal“によって注意を喚起して、「セルフサービスレストラン」の存在を示唆する。これは現場指示である。しかし、ここで際立つのは、指示された場所で存在する対象 (Lokatum)が話し手にとって外延的な対象ではなく、不意に発見した概念的な属性を持つことである。„ein Kinder-Gefängnis“と呼ぶベビーサークルが比喩的であり、„ein Selbstbedienungsrestaurant“も予期していなかった属性を持つ対象である内包(intension)であり、それらの発見が問題なのだ。つまり、それらは個体 *e* の存在を示すのではなく、個体の属性(Eigenschaft=property, <<*s*, <*e*, *t*>>, *t*タイプ)を指している。これは例えば、„Ich habe meine zukünftige Frau gefunden.“ (私は将来の妻を見つけた)のように、発話時点においては対象となる女性に当てはまらない属性であるが、話し手の思い描く将来の可能世界において、„meine (zukünftige) Frau“が成立するのと同様の属性である。(32b)の„ein Selbstbedienungsrestaurant“はそれ自体は外延的であるが、話し手・聞き手が見ている現場の世界にはそれまで見えていなかった(存在しなかった)「セルフサービスレストラン」が話し手の視界の眼前に登場したのであり、その対象に対して(このような場所で予測することができなかった)驚くべき属性が付与されるのである。

*es gibt* の存在の意味については Stechow (2001: 27)に従い、高階述語 exist<sup>P</sup>を設定する。

- (33) a.  $\text{exist}^P := \lambda w \lambda t \lambda P \exists x[\text{exist}_{wt}^P(x) \ \& \ P_{wt}(x)]$  ( $P$  は個体の属性を表す)  
 b.  $[[\text{einen Gott}]]^{M,w,t,g} = \lambda Q \exists x[\text{God}_{wt}(x) \ \& \ Q_{wt}(x)]$  (神であるような属性の存在)  
 c.  $[[\text{Es gibt einen Gott}]]^{M,w,t,g} = \exists t[t=s^* \ \& \ \exists x[\text{exist}_{wt}^P(\lambda w \lambda t \lambda x[\text{God}_{wt}(x)])]]$  in  $w$  at  $t$ . (発話時  $s^*$  と同じ時  $t$  が存在し、かつ、神の属性を持つ対象  $x$  の内包的属性がある)

ここで神 *Gott* は外延として存在するのではなく、 $\text{exist}_{wt}^P$  によって、神が実在する世界  $w$  と時間  $t$  から個体への関数として捉えられる。このように考えれば、所在文として、*„Auf dem Tisch gibt es ein Buch.“* が容認し難いことも理解できる。現にその場にある「本」は外延的対象であり、内包的ではない。逆に意外なモノがその場にあれば、現実世界に存在するモノでも容認できる。(34)はテーブルの下であちこち動き回るモノがいるために話し手が驚いて発したもので、後で猫とわかったのだが、発話時では非現実的な存在(*Hin-und Hergewutsche*)であると認識していたのである。(34b)は(34a)の意味表示である。

(34) a. Er ist erst recht sprachlos, als von unserem Tisch verhaltenes Kichern ertönt: Unter dem Tisch gibt es ein Hin-und Hergewutsche, weil Solos eine völlig verstörte Katze entdeckt hat. (...) (Jacobs, B. 2009, 273. *Landschaft zwischen den Knoten: NeoLit aus dem Neanderthal*. 下線部筆者)

(34) b.  $\exists t[t=s^* \ \& \ \exists x[\text{UNDER}_{wt}(x, t \ y[\text{Table}(y)] \ \& \ \text{exist}_{wt}^P(\lambda w \lambda t \lambda x[\text{Back-and-Forth-Sliding}_{wt}(x)])]]]$  in  $w$  at  $t$ . (世界  $w$ ,  $t$  においてテーブルの下に  $x$  がいて、 $x$  があちこち動き回るような属性が存在する時点  $t$  がある。)

発話時に存在するモノは具体物でなく、「あちこち動き回る」属性であり、それは現実ではなく、可能世界 $\langle w, t \rangle$ のどこかに存在するモノであると内包的に捉えられる。*es gibt* 構文の目的語が個体の属性だとすれば、現実世界で指示される対象が個体の属性に相応しいモノであれば良い。逆に、必要のない文脈で *es gibt* 文を発話すれば容認できない。内包表現が現実世界で発せられた場合の奇妙さをモダリティ表現で示そう。

(35) (現実世界で外を眺めて) a. Es regnet gerade. b. ??Es muss gerade regnen.

発話状況で実際に雨が降っている時、(35a)は現実世界 $\langle w_1, t_2 \rangle$ でのみ真であれば良いが、(35b)の認識的必然性を主張する発話では、現実世界から接近可能な世界の全てで真でなければならず、強力な真理条件(必然性)を要求する。しかし現実世界で(35b)を発話するのは不自然である(現実世界が話者にとって接近不可能で、その他の間接証拠が成立する可能世界の集合から「雨が降っている」ことが帰結すれば自然になりうる)。実際に談話状況で雨が降っている場合、(35a)は強い言明であるが、(35b)は現実の談話状況＝現実世界に接

近不可能な場合のみ適切となりうる。*es gibt* 構文はこのように現実世界における発話状況での妥当性について関与しない内包的存在表現である。次も同様である。

(36) a. Heute gibt es ein Konzert am Radetzkyplatz! b. Heute gibt es das Konzert im Dom.(Google)

(37) a. Mich gibt es in zwei Zuständen. (Google)

b. Mich gibt's nur einmal. (Weltklimakonferenz COP21)

(36a, b)は事象という抽象的な事象の存在を述べ、聞き手に想起させる働きを持つもので、実際に発話現場に事象があるわけではない。また、属性は不定でも定でも問題ない(話し手が想起する内包的な個体属性)。(37a, b)は話し手 *mich* が対象であり、話し手の存在は前提され、定解釈であり、直示表現でもある。英語の *there* 構文ではあり得ないが(, \*There is me in two states.), (37a)は直接に「私」(話し手)の存在を指示するものではない。「私(*mich*)」が状況によって「2つの別々の状態にある」という可能世界の状況が問題なのだ。

(37a')  $[[\text{Mich gibt es in zwei Ständen}]]^{M,w,t,g} = \exists t[t=s* \ \& \ \exists x[\text{exist}_{w'}^P(\lambda w \lambda t \lambda x[\text{Speaker}_{w'}(x)])] \ \& \ \exists t' \exists z[t' \neq t \ \& \ \text{exist}_{w'}^P(\lambda w \lambda t[\text{State}_{w'}(x,z)])]]$  in  $w$  at  $t$ .

(37a)は、「私」というかけがえない存在の置かれた属性=状態について述べたものである。これが存在文であるのは内包的意味においてだけであり、認知意味論的な立場でどのようなメタファーによってこの文を説明するのか明確ではない。メタファーという曖昧な図式では「何でもあり(*anything goes*)」状態になるが、本稿の分析では、個体の属性の存在に関する形式意味論的な定義が可能になり、明示的な説明であると言える。

*es gibt* 構文で、外延的な存在表現が不可能というわけではない。次の例がそうである。

(38) Auf dem Sportplatz gibt es auch einen Kinderspielplatz. Duschen und Umkleiden sind vorhanden. (Google 検索)

(38)では「運動場に子供の遊び場もある」という場所における対象の存在が表されている。„?Auf dem Tisch gibt es ein Buch.“との違いは、この文では一時的な「本」の存在が言及されているのに対し、(38)ではモノの一時的存在ではなく、持続的存在が表されることである(部分-全体関係)。現実世界における外延の対象の存在でも、それが(可能世界を跨ぐ)持続的・恒常的な時間インターバルにおける存在ならば、*es gibt* 文は許容される。<sup>9</sup>

<sup>9</sup> Czinglar (1997)は *es gibt* 文は「永続的滞在場所である」時に場所句と共に指摘する。

## 6. 結論と展望

以上、ドイツ語の存在表現の意味と言語形式について考察し、次の点を明らかにした。

- (39) (i) *sein* の絶対用法はコピュラではなく、*existieren* と同様の存在意味を表す。ただし、ドイツ語の主文が V2 文であるという条件の下で、述部を持たない絶対的存在表現は中域が空である点で有標であり稀であり、„Gott ist.“, „also bin ich.“等に限定されている。
- (ii) „Da ist eine Katze.“のような *da sein* 文は、英語の *there* 構文と同じく、対象の存在、場所における個体の一時的存在を表すことができる。*da* は前域を占める虚辞である。
- (iii) „Das Buch ist auf dem Tisch.“のような対象-場所句文は、コピュラを含むコピュラ文と同じ構造である。それに対し、場所-対象を示す所在文(„Auf dem Tisch ist ein Buch.“)は存在文の一種であり、場所におけるモノの一時的な存在について言及する。
- (iv) *es gibt* 構文は、習慣的・恒常的なモノの存在、内包文脈における個体の属性の存在について言及される場合に用いられる。可能世界を横断する個体の属性について用いられるので、対象物が定名詞句であっても、定名詞句の内包は、それぞれの可能世界によって外延が変化しうるので、特定個体として限定されることはなく、容認される。逆に、*es gibt* 文は一時的な時空間における所在物の存在に言及するのには不適切である。
- (v) 存在文の表現と意味は、単純なモノの存在のみならず、時空を超えた可能世界に跨る対象＝個体の属性の存在までを考慮する場合に複雑な表現形式と意味を持つ。

この結論はデータのさらなる検討によって検証されねばならない。最後に、Marty (1918) の単独判断(*thetisches Urteil*)との関連で存在表現について見る。„Auf dem Tisch ist ein Buch.“のような所在文は単独判断であるが、„Das Buch ist auf dem Tisch.“のような対象が先行する文は複合判断であると考えることができ、語順によって判断のあり方も異なる。Marty は直示表現(„Diese Blume ist blau.“)は複合判断形式だと主張するが、„Mich gibt's nur einmal.“のような話者の言及について、複合判断と捉えることはできない。この文は、「私(話し手)とはどんなものか」について述定したものではなく、「私という存在は一度限りのものとしか存在しえない」という事象の定立について全体として述べた単独判断である(形式的には「擬似複合判断」)。それゆえに、直示表現の単純な考察だけでなく、意味論・語用論を含めた総合的な考察が今後とも必要である。

## 参考文献

- Bayer, J. & Suchsland, P. (1997): Expletiva und leere Subjekte im Deutschen. *GAGL* 41, 12-38.
- Cann, R (2003): Interpreting ‚Be‘ In: Weisgerber, M. (ed.): *Proceedings of the Conference sub7 - Sinn und Bedeutung*. Arbeitspapier 114, FB Sprachwissenschaft, Universität Konstanz, 95-109.

- Cztinglar, Ch. (1997): Bemerkungen zur Existenzbehauptung und Ortsbestimmung im Deutschen und alemannischen Varianten. *GAGL* 41, 39-60.
- Cztinglar, Ch. (2002): Decomposing existence: Evidence from Germanic. In: Abraham, W. & Zwart, C.J.W. (eds.), *Issues in Formal German(ic) Typology*. Amsterdam: Benjamins, 85-126.
- 大喜祐太 (2016): ドイツ語 es gibt 構文の特性: 事物の「所在」を記述しない存在表現 『言語科学論集』 22, 67-86.
- Dolińska, J. (2012): *Zur Klassifizierung der Prädikative*. PhD. Dissertation, Universität Jena.
- Dowty, D., Wall, R., & Peters, S. (1981): *Introduction to Montague Semantics*. Dordrecht: Reidel.
- DUDEN (2009): *Die Grammatik*. DUDEN Bd.4. Berlin: Dudenverlag.
- フレーゲ, G. (1892): 「概念と対象について」(野本和幸訳 1999) 『フレーゲ著作集』 4. 勁草書房, 49-70.
- Fujinawa, Y. (2017): Licht und Schatten der kategorischen/thetischen Aussage: Kopula und Lokalisierungsverben im deutsch-japanischen Vergleich. *LB Sonderheft*, 15-40.
- Gabriel, M. (2013): *Warum es die Welt nicht gibt*. Berlin: Ulstein.
- Haider, H. (1993): *Deutsche Syntax - Generativ*. Tübingen: Narr.
- Kahn, Ch. H. (1966): The Greek Verb 'To Be' and the Problem of Being. *Foundations of Language* 2, 245-265.
- カント, E. (1787<sup>2</sup>): 『純粹理性批判』 6, (中山元訳 2011) 光文社.
- Kratzer, A. (1995): Individual-Level and Stage-Level Predicates. In: Carlson, G.N. & Pelletier, F.J. (eds.): *The Generic Book*. Chicago: Chicago University Press, 125 -175.
- Lakoff, G. & Johnson, M. (1980): *Metaphors We Live by*. Chicago: Chicago University Press.
- Lewis, D. (1986): 『世界の複数性について』(出口康夫監訳 2016) 名古屋大学出版会.
- Marty, A. (1918): Gesammelte Schriften, In: Eisenmeier, J., et al. (Hg.), *Schriften zur deskriptiven Psychologie und Sprachphilosophie*, Vol. II/1. Halle: Max Niemeyer.
- Milsark, G. (1974): *Existential Sentences in English*. PhD. Dissertation, MIT.
- 最上秀明 (1987): ドイツ語の存在文をめぐって 『独語独文学科研究年報』 13, 71-86.
- Montague, R. (1974): *Formal Philosophy. Selected Papers of Richard Montague*. In: Thomason, R.H. (ed.). New Haven/London: Yale University Press.
- 西山裕司 (2003): 『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』, ひつじ書房.
- Partee, B.H. (1986): Noun phrase interpretation and type-shifting principles. In: Groenendijk, J., de Jongh, D. & Stokhof, M.: *Studies in Discourse Representation Theory and the Theory of Generalized Quantifiers*. Dordrecht: Foris, 115-143.
- Pütz, H. (1975): *Über die Syntax der Pronominalform ,es' im modernen Deutsch*. Tübingen: Narr.
- Stechow, A.von. (2001): Temporally opaque arguments in verbs of creation. In: Cecchetto, C., Chierchia, G. & Guasti, T. (eds.): *Semantic Interfaces: Reference, Anaphora, and Aspect*, Stanford: CSLI, 278-319.
- Weinert, R. (2013): Representational/Existential Structures in Spoken versus Written German: *Es Gibt* and *SEIN*. *Journal of Germanic Linguistics* 25.1, 37-79.
- 吉本啓・中村裕昭 (2016): 『現代意味論入門』 くろしお出版.



## Zur Syntax und Semantik der Existentialausdrücke im Deutschen

Mitsunobu YOSHIDA

Im vorliegenden Aufsatz handelt es sich um Syntax und Semantik der Existentialausdrücke im Deutschen wie z.B. *sein*, *da sein*, *es gibt* und PP+*sein*+Lokatum (Lokativsatz). Weil das Verb *sein* sowohl als Existenzverb wie auch als Kopula fungiert, ist es manchmal schwer festzustellen, welche Bedeutung *sein* in der jeweiligen Konstruktion hat. Daher soll genau überprüft werden, wann und wo *sein* als Existenzverb verwendet wird. Vor allem geht es darum zu erklären, warum sich die absolute Verwendung von *sein* nur auf unikale Objekte wie *Gott* beschränkt (1). Bei *da ist* ist es jedoch durchaus möglich, die temporäre Existenz eines Objekts an einem bestimmten Ort auszusagen (2). Auch in einem lokativen Satz, in dem eine mit einer Präpositionalphrase (PP) ausgedrückte Lokation und ein Lokatum vorkommen, liegt der existentielle Gebrauch von *sein* vor, weshalb *es gibt* unakzeptabel ist (3). Schließlich kommt *es gibt* vor allem in Kontexten vor, in denen nicht die Existenz eines extensionalen Objekts, sondern eher die über Welt und Zeit hinausgehende Existenz eines intensionalen Objekts ausgedrückt wird:

- (1) a. Gott ist.    b. \*Ein Gespenst ist.    c. Ich denke, also bin ich.
- (2) Da ist eine Katze (im Garten).    (*da* als Expletiv)
- (3) a. Auf dem Tisch ist ein Buch.    b. ??Auf dem Tisch gibt es ein Buch.
- (4) Es gibt zwei deutsche Staaten. Es gibt die Verpflichtungen der vier Mächte. (...) Es gibt den europäischen Prozeß. (...) (Archiv der Gegenwart, 2001, DWDS Korpus)
- (5) Und später in der Stube beim Anblick eines Laufstalls: Guck mal, hier gibt es ein Kinder-Gefängnis! (Google-Suche)

In diesem Aufsatz wird der obige Befund im Rahmen der Generativen Syntax und der Mögliche-Welten-Semantik untersucht. Das intransitive Existenzverb *sein* kommt im Hauptsatz deshalb beschränkt vor, weil das Deutsche eine Verbzweitsprache ist, in der eine Phrase ins Vorfeld und das finite Verb an die zweite Stelle des Satzes gerückt werden, so dass das Mittelfeld leer bleibt ( [CP Gott [C ist] [TP ~~Gott ist~~]]). Das *sein* gilt im lokativen Satz als existential, da die Lokation (PP) das Lokatum in einem räumlich-temporären Zustand lokalisiert. Im Gegensatz dazu stellt *es gibt* die Existenz einer abstrakten Eigenschaft eines Objekts, die im Äußerungskontext dem Sprecher unerwartet vorkommt (5), oder die permanente bzw. dauerhafte Existenz eines abstrakten (oder auch konkreten) Objekts (4) dar.